

脱グローバル化エッセイシリーズ 4



2022年10月

南アジアに脱グローバル化の余力なし

サンジェイ・カトウーリア

グローバル化は本当に終わりつつあるのか

グローバル化の終焉については大幅に誇張されてきた¹。確かに財とサービスの世界貿易は、2008年に世界の対GDP比61%でピークに達したのち、2020年には52%、COVID-19流行前の2019年には56%となった。しかし、こうした大雑把な統計は多くの重要な傾向を見えにくくしている（Wolf, 2022 参照）。

一つは、多くの主要貿易国・グループにおいて貿易に対する開放性がまだピークを迎えていないことである。2021年、最大の貿易グループである欧州連合は貿易の対GDP比

¹ ここでは、グローバル化で最も頻繁に使用される指標である貿易にのみ言及している。例えば、外国直接投資（FDI）などの国境を越えた資本移動については論じていない。しかし、海外直接投資は貿易と高い相関関係にあるため、海外直接投資の問題はよく議論の対象となる

が93%と過去最高を記録した。世界貿易の新星であるベトナムは、急激に貿易額が伸び続けている。ブラジルの貿易は2021年に対GDP比39%と過去最高を記録した。一方、世界三大経済大国である中国、米国、日本は頭打ちとなっている。

二つ目は、サービス貿易が増え続けていることである。サービスは小さな基盤からスタートして拡大するものであり、非常に多様で、オンラインで提供できるものが多いことが理由だ。COVID-19流行前の2019年、サービス貿易は世界のGDPの13.6%と過去最高を記録した。

したがって、一部の主要貿易国が世界貿易への依存度を下げたとしても、貿易面での連携を深めようとする他の国々にとっては、財とサービスの分野で引き続きチャンスが増大している。

グローバル化の初期段階にある南アジア

南アジア諸国は、経済規模、発展の段階、貿易の開放性に対する中途半端な取り組みなどを考慮すると、グローバル化の初期段階にあると言える。このことは、以下の事実によって裏付けられる。

南アジアはグローバル化を受け入れることに非常に消極的である。2019年の南アジアの平均適用関税率は12.8%で、世界平均5.7%、東アジア・太平洋平均4.38%に対し、どの地域よりも高い(WITS, n.d.)。貿易がグローバルな貧困軽減の重要な要因であることを示す、幅広い証拠が存在していてもこの状態である。実際に、南アジアの代表的な二つの例としては、バングラデシュとインドが、需要を刺激し、より質の高い雇用を創出し、生活水準を向上させるにあたって、貿易の持つ力を実感してきた。

それどころか、南アジア地域は、グローバル化の受容において世界全体よりもはるかに及び腰である。世界で最も繁栄している地域、ヨーロッパ、北米、東アジアは、財とサービスの貿易や相互に連携したサプライチェーンを通じて、近接性のメリットを享受している。対照的に、南アジアは世界で最も地域統合が遅れており、2020年の貿易総額に占める財の域内貿易の割合は、ASEANの21.1%、東アジアの35.9%に比べ、わずか5.8%である²。

インドを除けば、南アジア諸国はいずれも、貿易の占める割合が低いことを説明できるほどには経済規模が大きい。実際、ほとんどの場合、貿易の対GDP比は低下している。貿易の対GDP比がピークを迎えたのは、パキスタンが1996年(38%)、バン

² この図式は、パキスタンを地域別の計算から除外したとしても変わらない。例えば、南アジア地域小地域経済協力(SASEC)(バングラデシュ、ブータン、インド、モルディブ、ミャンマー、ネパール、スリランカ)では、2020年の域内貿易はわずか5.6%、ベンガル湾多分野技術経済協力イニシアチブ(BIMSTEC)(バングラデシュ、ブータン、インド、ミャンマー、ネパール、スリランカ、タイ)では6.3%だった。データはARICデータベース(ADB, n.d.)より出典。

グラデシュが2012年（48%）で、小さな島国のスリランカでさえ2000年（89%）である。こうした状況は、南アジア諸国が発展段階のお手本とすべき、東アジアの大規模な中所得国の状況とは対照的である。表1に示すように、タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピンの貿易比率は、対GDP比88~220%という高い、または非常に高い値でピークを迎えている。また、ピークを過ぎたとはいえ、現在の貿易比率は南アジアの国々と比べてはるかに高い。ベトナムに関してはまだピークに達してはいない。

バングラデシュ、そして特にインドに牽引され、南アジアは財とサービスの世界輸出額におけるシェアを1990年の0.8%から2021年には2.72%へと増加させた。東アジア諸国と比較してグローバル化がまだ初期段階であることから、南アジア諸国には、適切な政策に注力することで、このシェアを大幅に拡大する余地が十分にある。

表1

ピーク時および現在の貿易額対GDP比：南アジアおよび東アジアの特定国

	現在の貿易額対 GDP比、2021年 (%)	ピーク時の貿易額対 GDP比 (%) と年
バングラデ シュ	28	48 (2012)
パキスタン	30	38 (1996)
スリランカ	43	89 (2000)
インド	44	56 (2012)
タイ	117	140 (2011)
ベトナム	184	184 (2021)*
フィリピン	64	88 (2003)
インドネシ ア	40	96 (1998)
マレーシア	131	220 (2000)

注：貿易には財とサービスが含まれるが、ベトナムは財のみを含む。ピークは貿易額対GDP比が最も高くなった年を示す。

経済ナショナリズム台頭の影響

経済ナショナリズムは世界全体で台頭しつつある。そのことを雄弁に物語るのが英国のEU離脱（ブレグジット）や米中貿易戦争だが、これも2つの例に過ぎない。しかし、南アジアのすべての国とは言わないまでも、ほとんどの国で反輸出バイアス³が働いていることを、世界的な経済ナショナリズムや世界経済の成長鈍化のせいにするのは難し

³ 南アジア諸国の貿易政策の詳細については、カトゥーリア（2018年）を参照のこと。

い。南アジア諸国は貿易自由化の政治経済に対処することができず、また貿易について前向きなストーリーを作り出すことができなかつた。このような取り組み方が原因で、そうした国々は国内の保護主義者の圧力を受けやすくなつた。そのため、バングラデシュ、パキスタン、スリランカなどは、過去15年間の異なる時期に、貿易自由化の方針を転換し、関税（および準関税）の引き上げや貿易体制の透明性低下という方向に向かつた。インドでは、関税率が15%を超える関税品目の割合が、2015年の5.8%から2020年には10.6%に上昇した。また同国は2020年から、電子機器などの主要部門で国内生産を増強し、輸出を増やし、輸入を減らすための「生産連動型優遇策（PLI）」を開始している。

南アジアにグローバル化は不可欠

インドの国内市場は、規模も大きく成長中ではあるものの、グローバル企業にとっては多くの分野でまだ十分な規模とはいえない。世界銀行のPoverty Calculator（貧困度の算出指標）によると、中所得層以下の貧困ラインである1日3.65ドル（2017年、購買力平価）を用いた場合、2019年のインドの貧困率は44.8%だった（世界銀行、2022）。ある推計によると、インドの中産階級の市場規模は、2019年には0.5~1.3兆ドルだった⁴。これを2019年の世界の輸入額24.3兆ドルと比較すると、その差は明らかだ。さらに、輸出はインド経済の高成長期である2002年から2018年の間、同国全体の成長における重要な促進剤となつてきた（Chatterjee & Subramanian, 2020）。より一般化すると、大規模で弾力的な世界市場にアクセスすることは、インド企業の規模拡大、イノベーションの促進、生産性の向上に役立つ。

もう一つの視点として、人口が同程度の国であるインドと中国の数値を比較してみたい。2021年、中国は1810億ドルの海外直接投資を誘致したのに対し、インドは450億ドル（国連貿易開発会議、2022）だった。2020年の中国の国内消費は8兆1000億ドル、インドは2兆2000億ドルである。そして、2021年の相対的輸出額（財とサービス）は、それぞれ3兆5500億ドルと6600億ドルである。インドがイノベーション、生産性、規模の面で中国の水準に近づくためには、海外直接投資と輸出における格差を埋めなければならない。

南アジアの他の地域にとっても、グローバル化は必要不可欠な課題である。一つには、バングラデシュ、ブータン、ネパールの3カ国は今後1~4年の間に後発開発途上国の地位を脱する見込みであり、世界市場へのアクセスを確保するために、さらなる努力が必要である。グローバル化のもう一つの必須条件は、世界と関わりを持ち、効率性を高め、貿易の恩恵によって繁栄を享受するということだが、この地域の国々はようやくスタートラインに立ったばかりだ。グローバル化のピークに達したと宣言するには、まだ

⁴ Chatterjee & Subramanian（2020）を参照のこと。

まだ先は長い。それどころか、スリランカやパキスタンは現在経済危機に瀕しており、国際貿易や通商を軽視する、いやむしろ逆行するという愚行に出ている⁵。

南アジアにとっての好機

世界の貿易形態は変化を続けている⁶。中国は、こうした変化の多くにおいて中心的存在である。同国の賃金はここしばらくの間、上昇を続けている。内向き志向を強めており、過去3年間に渡ってグローバルなバリューチェーンへの参加を減らしている。中国経済全体に占める輸出の割合は2006年にピークを迎え、GDPの36%を占めるまでになった。かねてより、多くの国が中国への過度な依存を脱するため、サプライチェーンの多様化に努めていたが、この圧力はCOVID-19感染拡大後強まっている。その上、米中貿易戦争が現在も継続中だ⁷。

こうしたことのすべてが、南アジアを含む世界の他の国々にとって貿易を拡大する好機となる。

多様化に加え、サプライチェーンの弾力性や持続可能性への懸念から、サプライチェーンの縮小が議論されるようになった。このことは、南アジアにおける地域経済統合の推進（域内サプライチェーンの構築を含む）に弾みをつけるものであるが、前述の通り、同地域の潜在能力はかなり不足している。

インドは、この機会を捉え、取り組みの過程で近隣諸国の経済状況も向上させることができるのだろうか？一つの側面として、同国は規模の面で中国に匹敵する唯一の国であり、中国からの分散戦略を模索する世界各国にとって、当然ながら望ましい進出先であると言えるだろう。インドは市場規模が大きいだけでなく、低賃金で、多くの業界において技術的能力を有している。さらに、デジタル化の影響、再生可能エネルギーへの巨額の投資、有利な地政学的環境などが、インドをさらに後押ししている⁸。インドがその好機を生かすことができれば、近隣諸国は巨大な隣国のダイナミズムから恩恵を受けることができるのだろうか？

バングラデシュは、南アジア第二の経済規模があると同時に輸出国でもあり、多様化を求める世界の国々にとって魅力的な投資先となることを望んでいる。少なくともアパレル分野では、同国にはスケールメリットがあるが、アパレル以外の分野への多様化も必要だ。また、外国人投資家に対して、より投資しやすい環境と公平な競争の場を作ることも必要である⁹。

⁵. カトウーリア (2018) を参照のこと。

⁶. この問題に関する議論についてはカトウーリア (2021a) を参照のこと

⁷. Nicita & Razo (2021) も参照のこと。

⁸. 『The Economist (エコノミスト)』 (2022) なども参照のこと。

⁹. カトウーリア (2021b) を参照のこと。

今後の展望

欧州連合の平均的な関税率は、2020年には1.7%だった。高所得国を目指す南アジア諸国は、高所得国が、一部の小さい島国を除き高関税を課していないことを肝に銘じるべきだろう。

南アジア諸国は、グローバルなバリューチェーンにさらに深く関わるために、効率性を特に追求するタイプの海外直接投資をより多く引き付ける必要がある。そうした海外直接投資を誘致するためには、関税率の低減と、バリューチェーンの象徴ともいえる部品貿易を加速させるための効率的な貿易円滑化に向けた環境作りが求められるだろう¹⁰。

南アジアの他の地域も、インドのダイナミズムと有利な地政学的状況から大きな恩恵を受けることができる。この目標達成にあたっては、域内バリューチェーンと域内海外直接投資が大きな役割を果たすだろう。そのために、企業間の情報フローのコストを削減し、投資促進を担当する政府当局が地域企業の目標設定をより効率的に行い、域内貿易の非常に高いコストを引き下げるための政策介入が必要になる。南アジアにおける地域投資のパイオニア企業に対する詳細な調査に基づくこうした多くの提言については、Kathuria et al. (2021) が論じている。

もちろん、あらゆる政策決定にはトレードオフがある。貿易自由化には常に勝者と敗者が存在し、非効率な分野では移行が困難かつ長期間に渡る可能性がある。この場合、各国は社会的保護体制を強化し、特に影響を受けやすい分野があれば、可能な限りサンセット条項を使って自由化を先送りすることが重要である。

結論

南アジアには、脱グローバル化の余力はない。実際、インドを含むこの地域の国々は、グローバルな商取引だけでなく、地域の商取引にも深く関わっていく必要がある。南アジア諸国の多くはGDPの規模が小さいので、貿易額の対GDP比の上昇に歯止めをかけることができない。インドでさえ、2026~2027年までに5兆ドルの経済規模に達し、2047年までに上位中所得国になるという目標を掲げてはいるものの、その目標を達成するためには、貿易、海外直接投資、グローバル化による大きな後押しが必要である。

南アジアは、依然として比較的未開拓の市場であり、大きな成長の可能性を秘めている。この地域は、適切な政策の組み合わせとビジョンがあれば、グローバル化した環境がもたらす今ここにある好機を活用することが可能になる。

¹⁰ 世界銀行（2020）を参照のこと。

参考文献

アジア開発銀行 (n.d.) *Integration indicators*. Asia Regional Integration Center. 2022年10月4日、以下より取得。

<https://aric.adb.org/database/integration>.

Chatterjee, S., & Arvind Subramanian (2020, October). *India's inward (re)turn: Is it warranted? Will it work?* Ashoka University.

https://ashoka.edu.in/static/doc_uploads/file_1602585593.pdf

『The Economist (エコノミスト)』 (2022年5月14日) *India is likely to be the world's fastest-growing big economy this year.*

<https://www.economist.com/briefing/2022/05/14/india-is-likely-to-be-the-worlds-fastest-growing-big-economy-this-year>

Kathuria, S. (2022). *In South Asia, a reminder that poor economics can be poor politics*. The Wire. <https://thewire.in/political-economy/in-south-asia-a-reminder-that-poor-economics-can-be-poor-politics>

Kathuria, Sanjay (2021a), Editor's Introduction, in Kathuria, Sanjay (edited), *The Age of Ferment: Developments in Asian-European Trade Relations*. KAS Regional Economic Programme Asia (SOPAS), Tokyo.

Kathuria, S. (2021b, October 7). *Bangladesh is clothes-minded*. Foreign Policy. https://foreignpolicy.com/2021/10/07/bangladesh-garment-industry-economy-development-exports-trade-growth/?tpcc=recirc_latest062921

Kathuria, S. (Ed.). (2018). *A glass half full: The promise of regional trade in South Asia*. South Asia Development Forum, World Bank. <https://doi.org/10.1596/978-1-4648-1294-1>

Kathuria, S., Yatawara, R. A. & Zhu, X. (2021). *Regional investment pioneers in South Asia: The payoff of knowing your neighbors*. South Asia Development Forum, World Bank. <https://doi.org/10.1596/978-1-4648-1534-8>

Nicita, A. & Razo, C. (2021, April 27). *China: The rise of a trade titan*. UNCTAD. <https://unctad.org/news/china-rise-trade-titan>

国連貿易開発会議 (UNCTAD) (2022, June 9). *Global foreign direct investment flows over the last 30 years*. <https://unctad.org/data-visualization/global-foreign-direct-investment-flows-over-last-30-years>

Wolf, M. (2022, September 13). *Globalization is not dying, it's changing*. Financial Times. <https://www.ft.com/content/f6fe91ab-39f9-44b0-bff6-505ff6c665a1>

世界銀行(2022). *World development report 2020: Trading for development in the age of global value chains*. <https://doi.org/10.1596/978-1-4648-1457-0>

世界銀行(2022). *Country profile: India*. Poverty and Inequality Platform. Retrieved October 4, 2022, from <https://pip.worldbank.org/country-profiles/IND>

世界銀行(n.d.) World Bank Open Data. <https://data.worldbank.org/>

World Integrated Trade Solution (WITS). (n.d.). *AHS simple average by region product from world % 1988 - 2019*. Retrieved October 4, 2022, from <https://wits.worldbank.org/CountryProfile/en/Country/BY-REGION/StartYear/1988/EndYear/2019/TradeFlow/Import/Indicator/AHS-SMPL-AVRG/Partner/WLD/Product/Total>

Konrad-Adenauer-Stiftung e. V.

アジア経済政策プログラム (SOPAS)

コーディネーション: クリスティタ・マリー・ペレズ (シニア・プログラム・マネージャー)

岩川咲也 (プログラム・アシスタント)

2022年(令和4年)10月17日



The text / The text and the pictures / All articles in this publication are subject to Creative Commons License CC BY-SA 4.0 international (Attribution – ShareAlike)

"Worker in an industrial factory" by World Bank Photo Collection is licensed under CC BY-NC-ND 2.0. To view a copy of this license, visit <https://creativecommons.org/licenses/by-nd-nc/2.0/jp/?ref=openverse>.